

『人権に根差した識字・日本語学習をめざして：
2021年度・識字・日本語学習ボランティアの意識調査・
中学校夜間学級教職員の意識調査 報告書』
識字・日本語センター 2023年5月

木村政伸(西南女学院大学)

近年、公立夜間中学校の設立が全国で相次いでいる。私が在住する九州でも、22年度に九州初の公立夜間中学校(福岡市立)が開校したのを皮切りに、24年度からは福岡県内に北九州市立、大牟田市立が開校し、他にも佐賀県立、熊本県立、宮崎市立などの夜間中学校が開校して、一気にその数を増した。公立夜間中学の急増の一方で、それ故の課題も浮かび上がっている。それは、夜間中学のスタッフや行政担当者の知識や経験の不足である。その意味でも、2年先行した福岡市立福岡きぼう中学校の果たす役割は大きいし、本書に示された内容の数々が非常に示唆に富むものとなっている。

私は、この福岡市で27年前に始まった自主夜間中学・福岡よみかき教室のスタッフとして今日に至っている。その間の数度にわたる福岡市への公立夜間中学開設の請願なども経験し、行政や諸団体との連携や協議にも参加してきた。その意味で、識字教育や夜間中学に関する運動の経験はあるが、研究者としての関わりは欠いており、したがって今回の書評の任にふさわしいかは心もとない。そのことを最初にお断りしておきたい。

さて、本書は、2019年に行われた「だい30かい よみかきこうりゅうかい」の分科会で起こった差別発言を契機にして、「識字・日本語学習にかかわる人びとの人権意識」の問題に取り組む一環として実施された調査がもとになっている。実施主体が識字・日本語センターということもあり、大阪府内の識字・日本語教室と中学校夜間学級(公立夜間中学)のボランティア・教職員が調査対象となった。

本書には、その調査結果のデータが資料として後半そのまま掲載されているとともに、前半では、調査の概要がⅡ及びⅢにまとめられている。それに続くⅣに、大阪の被差別部落における識字、地域日本語教室、夜間中学校の三つの視点から「分析と提案」がなされている。それに続くⅤでは19の提言がまとめられ、最後にⅥとして「第8回識字・日本語学習研究集会 Part1・Part2 ダイジェスト版」が掲載されている。

それぞれの章は、内容も多岐にわたり、なおかつ重要な指摘も多く示唆に富む。ボランティアや教職員の中でも、識字・日本語教育や夜間中学をめぐる人権意識や基礎的な知識の不足、スタッフ間のコミュニケーションの難しさなどが、赤裸々に浮き彫りになっており、人権施策では「先進地」だと思っていた大阪での実情を改めてつきつけられた感がある。

非常によく出来た調査ではあるが、その中からいくつか個人的に思うことを述べてみたいと思う。

ひとつは、夜間中学の変化への教員の意識についてである。自由記述の中に、「このまま『文字をもたない世界で生き抜いてきた人』の世界を知る機会が減って、その世界の豊かさ(を)学ぶ機会が少なくなってきたのは、非常に残念に思う。自分はまだまだそこから学びたい。その豊かさや強さの魅力を、今のうちに、『文字を持つ世界』にも持ってこられないだろうか、活かさないだろうかと思うことが、最近特に増えてきた。」(94頁)という記述があった。私も、ここでいわれている「文字を持たない世界で生き抜いてきた人」の「豊かさや強さ」ということを、20数年自主夜間中学で学ぶ人たちと接してきて、非常に痛感している。座学で学んだ人権問題や差別事象を対面で語られた時の衝撃は今でも忘れられない。「何を学んでいたのか、何もわかっていなかったのではないか」と煩悶したことも多い。福岡の自主夜間中学での実践で感じることは、学習者とスタッフの相互の教育的関係である。確かに形式的には、スタッフが学習者の支援をおこなうというのが想定されているのであるが、実際はスタッフが学習者から学ぶことはとても多い。個人的には、この相互の教育関係を「共育」と呼んでいるのであるが、こうした関係性はとりわけ夜間中学では大事ではないだろうか。それが「夜間中学の魅力」であるとするこの教員が、学習者の変化や多様化にともなう夜間中学の変容にとまどう気持ちもよく理解できる。

このことと関連して、質問紙の項目について「夜間中学校の選択肢では、『学習者から学ぶことができた』という項目が設定されていない。質問紙の作成に関わった夜間中学校教員から、夜間中学校の教職員は給与をもらって働いているので、『学習者から学ぶことができた』という選択肢をここに入れるのはふさわしくないという意見が出されたためである」(16頁)という記述に目が留まった。表現は異なるが、選択肢の中に「世界への関心が広がった」や「とらわれに気づいた」があるということは、夜間中学の現場から学んでいるということを言っているようなものであるから、何をいまさら「学習者から学ぶことができた」を排除するのか理解に苦しむ。前出の教員の「自分はまだまだそこから学びたい」という気持ちとの何という落差なのだろうか。こうした形式的というか官僚的な対応がこの調査でもあったことは非常に残念である。